

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

滋賀県長浜市

○学校名

長浜市立びわ中学校

○学校のURL

<http://www.maroon.dti.ne.jp/biwa-jhs/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 7 学級 【特別支援学級】 2 学級 【合計】 9 学級

○児童生徒数

【全生徒数】 220 人

(内訳：1 年生 66 人、2 年生 84 人、3 年生 70 人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

心豊かでたくましく、夢と希望をもって主体的に生きる生徒の育成

【人権教育目標】

豊かな人権感覚を養い、一人ひとりの自尊感情を高める生徒の育成

○人権教育にかかる取組の全体概要

●テーマ「人権感覚あふれる学校づくりをめざして」

－生徒一人ひとりの自尊感情の育成を図る－

3 部会（授業づくり部会、仲間づくり部会、いのちの日部会）による学習支援の工夫や人権尊重の環境づくり、豊かな人間関係づくり、「いのちの日」の取組等を通して人権感覚を高め、自他を大切にする生徒の育成をめざした。

①「授業づくり部会」での取組

生徒が授業に興味を持ち、意欲的に学習に参加できるような手だてや工夫を、特別支援教育の視点を取り入れた授業を試行しながら、生徒一人ひとりを大切にする授業づくりをすすめる。

②「仲間づくり部会」での取組

生徒が安心できる居心地のよい学級づくりや、生徒が学習に取り組みやすいような教室・学習環境の整備について考え、ともに生きることをめざす教育を進める。

③「いのちの日部会」での取組

いのち・人権に焦点を当て、毎月 1 回「いのちの日」を設定し、資料提供と日常につながる学習を進める。

④「びわ中人権を考える週間」の取組

毎年 12 月上旬の校内人権週間において、朝の会、道徳、学級会活動等で、幅広く人権について考える機会を持ち、学習した内容を全校生徒集会で発表することを通して、生徒のコミュニケーション能力の育成と自尊感情を育み、人権を尊重する実践的な態度を養う。

⑤人権講演会や人権コンサート、地域人材による出前講座の取組

多様な人からの体験や夢を聞くことによって、様々な生き方に触れながら自分を振り返る機会を持ち、自他を大切に作る生き方を学ぶ。

3. 特色ある実践事例の内容

◆人権感覚あふれる学校づくりをめざして、生徒一人ひとりの自尊感情を育む取組

1) 取組のねらいと目的

ここ最近、自己肯定感が低く主体性に欠ける生徒、自己表現が苦手なコミュニケーション能力に欠ける生徒、学習面においては、わかる喜びや学ぶ意義を実感できずに授業を苦痛に思ったり、劣等意識から情緒が不安定になったりする生徒が、少なからず見えてきた。これらの課題を解決するために、生徒一人ひとりの自尊感情を高めることが第一と考え、「仲間づくり部会」「授業づくり部会」「いのちの日部会」に分かれ、学級活動や班活動の活性化、各教科でのグループ学習を取り入れた授業の実践に取り組んできた。さらには、一歩進んで特別支援教育の視点を生かした「ユニバーサルデザインを意識した授業づくり」「誰もが安心できる学級環境づくり」の取組を進めることで、生徒一人ひとりの自尊感情の育成につなげていきたいと考えた。

2) 取組を始めたきっかけ

最近の生徒の実態を見ると、通常の学級においても特別な支援を要する生徒の割合が増えつつあると感じる。また、学校生活になじめない不登校生徒や別室登校の生徒も少なからず見られるようになり、特別支援教育の視点を意識した指導をすべての生徒に行うことが、楽しい学校、人権感覚あふれる学校づくりにつながると全職員が意識したからである。特にその契機となったのが特別支援教育を専攻していた学生がスクールサポーターとして、本校に1年間、関わったことにより、職員への良き刺激となったことである。

3) 具体的な取組内容

①教科指導を通しての取組（授業における指導方法）

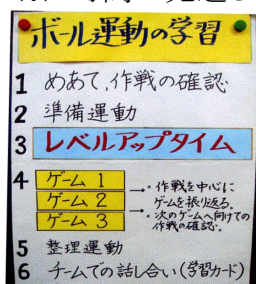
特別支援教育の手法を意識した授業のユニバーサルデザイン化に取り組む。

「目で見てわかる手がかりを用意する」など・・・

何をどのように学ぶのか視覚的に分かり易く工夫する。

●時間の構造化をする。

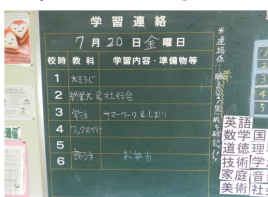
※1時間の見通しをもった学習の流れ



(体育科)

- 授業の始めに内容の進め方について全体的な見通しを提示する。
- 見通しが持てて安心する。
- 計画性がある。

※見通しをもって生活をする。



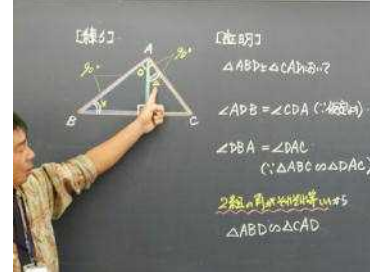
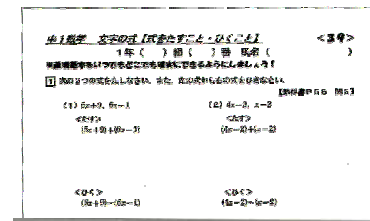
- 黒板の一端に「今週の予定欄」を設ける。
- 時間割の変更などについてはできるだけ早く伝える。
- 見通しを持って行動、自分から確かめて行動するようにする。

(週、月予定)

▲ユニバーサルデザインを授業に取り入れた各教科の取組と授業の流れのパターン化

- 数学科・・・音読計算を授業の始めに実施。
- 国語科・・・2分間の漢字テストを授業の始めに実施。
- 保健体育科・・・デジタイマーのカウントダウン機能を使い授業の始めに5分間走、30秒シュート練習等を実施。
- 各教科・・・授業のポイント、目標を提示し、授業の最初に本時のめあてを書く。

●情報伝達の工夫をする。



(数学科)

- 教科書の参照ページを記載する。
- 問題文の他にケアレスミスを減らすような「一言」を添える工夫をする。
- 意識をすることでミス無くせる。

- 丁寧な板書を心がける。色遣いのルールを設ける。
- ノートに書く時間と説明の時間を区別するなどの工夫をする。
- 先生が丁寧に書くと生徒も丁寧に書こうと意識する。



(社会科)

- 板書するときに、漢字にはできるだけルビを振って書くようにする。
- 読み方そのものが分からなくて、授業から遠ざかってしまう生徒が減る。

▲ユニバーサルデザインを授業に取り入れた各教科の取組と情報伝達の工夫

- 理科・・・ICTを活用し、シミュレーション実験や、大きく映像を映し出し見やすく拡大したりしている。

明るく大きく映し出されると集中しやすい。

●参加の促進を工夫をする。



helpカード

- 分からないことがあった生徒が、助言を受けやすくなる工夫をする。
- 「手助けしてもらえ」安心感が生まれる。
- ひと目で助けの必要な生徒が分かる。

- 少人数指導教室などで既習事項を張り出す工夫をする。
- 習ったことなのに、思い出せないという不安。
- 既習事項が張り出されていることで安心して取り組める。



(グループ学習を取り入れ全員役割をもって活動する)

- どの生徒も発表できる機会がもてるよう工夫をする。
- 発表することで、「達成感」を育み、その積み重ねが「充実感」につながる。

▲ユニバーサルデザインを授業に取り入れた各教科の取組と参加の促進の工夫

- 英語科・・・ペアやグループ学習を効果的に取り入れ、友達同士で取り組むことで、教え合い・励まし合いが生まれ、生き生きと活動できる。

②学級づくり、学習環境の整備を通しての取組

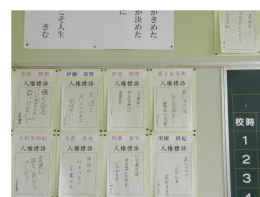
●場の構造化を工夫する ●ルールを明確化する ●学級内の相互理解を工夫する



- 教材の場所や置き方などがひと目でわかるように整理する。
- どこに、どのように片づければよいかが見ればわかるようにする。
- すっきりしていれば、集中力が上がる。

- 教室の棚等には目隠しをするなど、余計な刺激にならない配慮をする。
- 学習に関係のない刺激を減らす工夫をする。
- 目隠しカーテンで、視界もすっきりし、集中して学習に取り組める。

- クラス内の役割について、すぐに参照できる工夫をする。
- 役割が果たせたときに「自己有能感」を強く感じられる。
- 一人ひとりの役割を果たす意識が高まり「協力し合う関係」ができる。



- 一人ひとりの目標を明確にする個人目標を掲示する。
- 目標を生徒間で共有する。
- 「見守ってもらっている」「一緒に頑張っている」という認め合いにつながる。

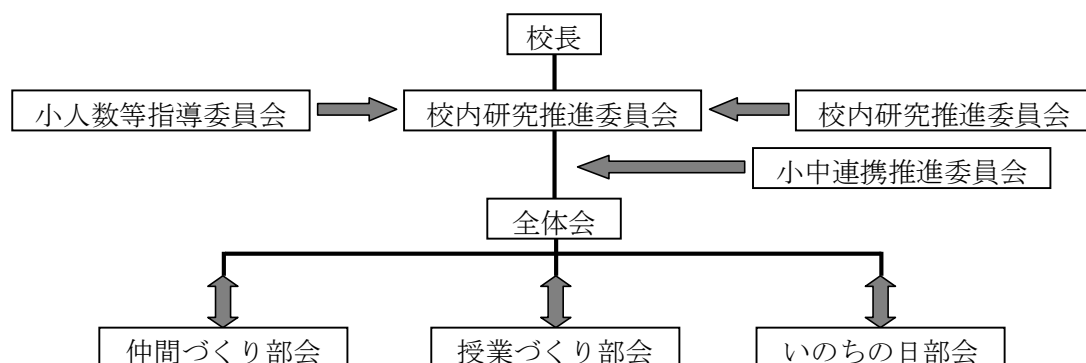
- 全ての生徒を大切にしている姿勢や雰囲気が感じられる学級掲示をする。
- ほのぼのとした暖かい雰囲気をつくる。
- 生徒は「分かってもらっている」「認められている」と感じる。教師は、「ほめるチャンスを増やす」ことを大事にする。

③人権週間における生徒集会の取組

自尊感情を育むために、踏み込んだ自治活動が生徒によって行われるよう、月1回のペースで生徒会主催の生徒集会を実施し、活動の報告や人権問題等に取り組んだ。特に、12月は、人権を考える週間において、各学年のテーマ(1年:よりよい仲間をめぐって、2年:よりよい学校をめぐって、3年:よりよい社会をめぐって)に基づきワークショップや学級討議を行い、その取組の結果を全校集会で発表し合った。1年生は「よりよいクラス・よりよい授業のために」と題して、パワーポイント等を使って発表をした。2年生は、「学校を10倍楽しくする方法」と題して、エンカウンターに取り組み、個人ではなく集団として活動することが欠かせないという発表をした。3年生は、「臓器移植」に関わってワークショップを展開しての発表を行った。どの学級・学年も、真剣な討論の結果をわかりやすく発表することができ、生徒たちの表情は満足そのものであった。



4) 取組の主体や実施体制



5) 取組の頻度

取り組みを始めて3年目となるが、授業実践については、各教科において出来るところから取り組むこととしている。また、年1回は、全職員が研究授業を実践することで実践の確認をし合うこととしている。

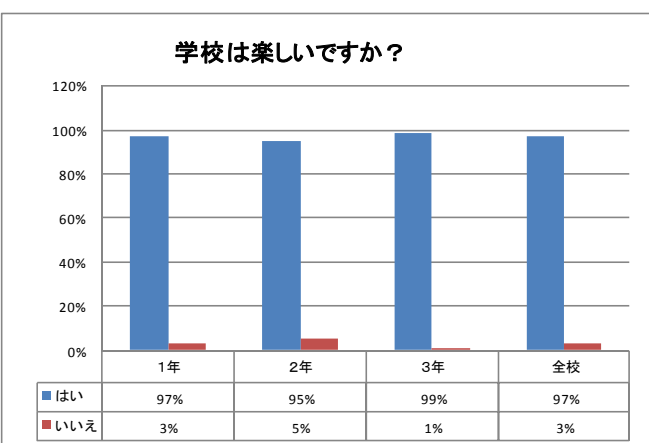
4. 実践事例の実績、実施による効果

平成23年度実施の生徒理解アンケートから、「学校が楽しい」と回答する生徒は95%を越える現状である。また、同年度の2学期末に行った学校評価アンケートにおいても、保護者、教師、生徒とも「喜んで学校へ通っている」の項目での達成率が80%を越えている。

これらの結果は、「授業づくり部会」、「仲間づくり部会」で取り組んだ、班を基盤としたグループ活動(学習)が円滑に機能し、仲間づくりや生徒一人ひとりの居場所づくりに成果があったのではないかと考えている。また、平成24年度からは、特別支援教育の手法を意識した授業のユニバーサルデザイン化に取り組み「わかりやすい授業づくり」「居場所のある学級づくり」に努めたことから、生徒一人ひとりが安心できる学校生活空間が体感できているものととらえている。毎月、12日を「いのちの日」と定め、いのちや人権に関わる読み物資料の選定・提供をし、年間を通した取組が生徒の中に浸透し始めている。

校内人権週間における生徒集会の取組では、学級単位、学年単位で人権に係る取組を行ったことから、学級、さらには学年所属意識が高まり、生徒の生徒による自治活動を推進できたことは、大きな収穫である。

平成24年度の校内人権週間では、生徒会が「いじめを考える」をテーマに初めてパネルディスカッションに取り組んだ。コーディネーターは、本校の生徒指導主事が努め、パネリストとして人権講演会の講師と各学年から生徒会本部の生徒4名が登壇した。パネリストとなった生徒はもちろん、フロアの生徒も真剣に耳を傾け、全校生徒がいじめについて考える良い機会となった。ただ、その受け止め方には、個人差があり、今後も回を重ねた取組ができるよう生徒の自治活動を推進したい。

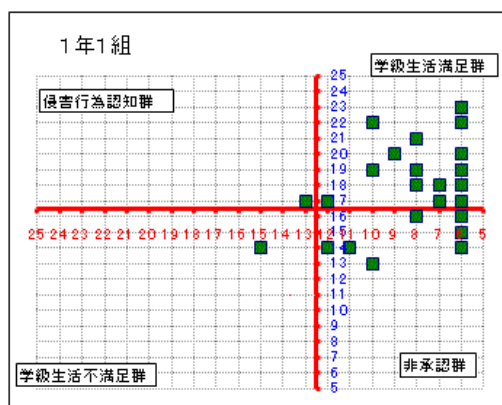


5. 実践事例についての評価

本校のめざす人権感覚あふれる学校づくりとは、安全・安心な学校であり、生徒も教師も一人ひとりが生き生きと活動し楽しく学べる学校である。かつ、その根拠となる人間関係や人権感覚が日々良好なことである。その実現に向け、今年度、特に取り組んだ「生活・学習・心」の3つに焦点をあてた「授業づくり部会」、「仲間づくり部会」、「いのちの日部会」の取組は、一定の成果が出たと感じている。

昨年度実施した人権意識についてのアンケート結果によれば、人権侵害の顕著ないじめ問題については「先生や友だち、親に言う」という回答が全体の60%、「いじめは絶対に許されない」と回答する生徒は全体の約半数であり、残念なことに「だめだと思いが黙っている」と回答する生徒が25%前後であった。自分を大切にすることはできても、他の人の大切さを認めることやコミュニケーション能力については、まだまだ発展途上であることが伺えた。

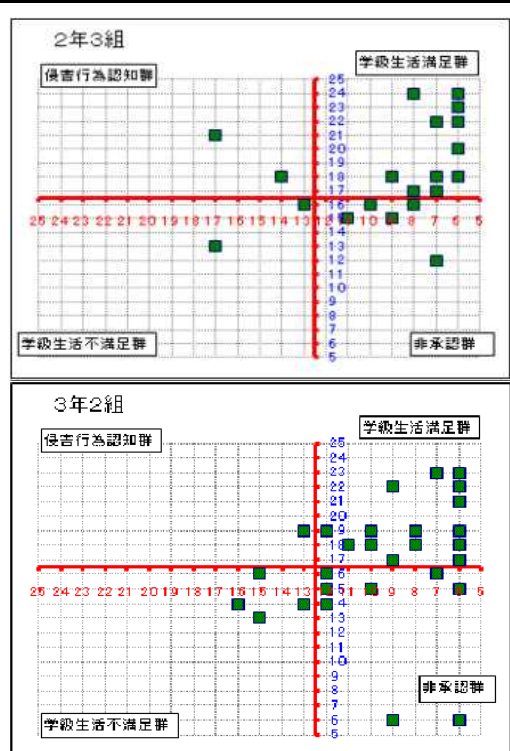
学級満足度調査H24、1学期							
	1-1	1-2	2-1	2-2	2-3	3-1	3-2
学級生活満足群	70%	63%	52%	89%	65%	82%	59%
侵害行為認知群	3%	3%	8%	0%	8%	3%	3%
非承認群	23%	28%	20%	7%	19%	12%	26%
学級生活不満足群	3%	6%	20%	4%	8%	3%	12%
学級の子どもの様子	学級生活満足群に近い平均的学級	満足群に近い平均的学級	平均的学級	学級生活満足群に近い平均的学級	満足群に近い平均的学級	学級生活満足群に近い平均的学級	平均的学級
	学級生活満足群に近い平均的学級	満足群に近い平均的学級	平均的学級	学級生活満足群に近い平均的学級	満足群に近い平均的学級	学級生活満足群に近い平均的学級	平均的学級



一方、右の表とグラフは、本年度、一学期末に実施した「学級満足度調査」の結果である。各学年・学級ともに、平均的学級以上の結果が出ており、学級生活に概ね満足している生徒が多くなっている。この後、再度の「学級満足度調査」の実施、および学校評価の実施により、生徒や保護者の意識の変容を探っていきたい。

今後も、「人権感覚あふれる学校づくり」を進めるとともに、小中連携や校区の認定子ども園との交流を進めながら、さらに、「学校運営協議会」との連携を図りつつ、地域とのパイプを強化しながら、将来への展望を持った教育が推進できるよう、実践交流や指導方法の研究に努めていきたい。

※参考文献 東京書籍出版 「通常学級での特別支援教育のスタンダード」



【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

長浜市立びわ中学校

特別支援教育の視点や手法を取り入れた授業改善の取組を掲げ、多彩な授業改善の工夫が具体的に示されている。また、学級内での相互理解を促進するための、教室の掲示や学級通信を改善工夫、生徒たちが「わかってもらっている」「認められている」と感じるような意識的な環境整備の在り方なども具体的に示されている。ほかにも、学校としての意識的な人権教育として、毎月1回の「いのちの日」の活動の設定、12月の人権を考える週間における「臓器移植」に関するワークショップの事例などが紹介されている。

生徒が主体的に報告や発表を行う場面を数多く設定するなど、「自尊感情を育むために、踏み込んだ自治活動」を積極的に推し進めている取組事例である。